

いなば しろうさぎ 因幡の白兔

にほん しんわ
日本の神話

むかしむかし、

おき しま ちい しま いっぴき しろ うさぎ す しろうさぎ うみ む
隠岐の島という小さな島に、一匹の白い兔が棲んでいました。白兔は海の向こうの
いなば くに よ おお しま なが む しま い
因幡の国と呼ばれる大きな島を眺めては、「向こうの島へ行ってみたいなあ。」といつも
おも
思っていました。

ある朝、たくさんのサメが泳いでいるのを見て、白兔はいいことを思いつきました。

「サメ君、ちょっと話があるんだ。」

「何だい、うさぎ君。」サメがたずねました。

「僕の仲間と君の仲間、どちらが多いか比べっこをしようよ。」兔が言うと、

「いいとも、面白そうだ。」

「じゃ、君は仲間をたくさん集めておくれ。」

「よし、きた。」

さっそく海には、たくさんのサメたちが集まってきました。

「サメ君、サメ君。まずは君たちが、因幡の国まで一列に並んでおくれ。」

「僕は、君たちの背中の上を渡りながら、数えていくよ。」

「よし、分かった！さっそく始めよう。」

サメたちは、こちらの島から向こうの島まで一列に並びました。

「1、2、3、4 …」

うさぎ
兔は、ぴよんぴよんと、サメの背中の上を跳んでいきました。

「しめしめ、上手くいったぞ。」

ごじゅうご ごじゅうろく ごじゅうしち ごじゅうはち
「5 5、5 6、5 7、5 8 …」

すこ いなば くに
あともう少して、因幡の国です。

しろうさぎ うれ とくいまんめんほんとう い
白兔は嬉しくなって、得意満面に本当のことを言ってしまうました。

くら べっこなんて うそ ぼく はただ いなば くに い きみ ば か
「比べっこなんて嘘だよ。僕はただ因幡の国に行きたかっただけさ。君たち、お馬鹿さ
んだな！」

それを聞いたサメたちが、「何だと、よくも騙したな！」とかんかんに怒って、大きな牙

をむくと白兔の毛皮を剥いでしまいました。

毛皮を剥がされた白兔は、痛くて痛くて、わんわん泣きました。そこへ大勢の意地悪な神様たちが通りかかりました。神様たちは、八神姫という美しい神様に結婚を申し込みに行くところでした。白兔に気づいた神様の一人が言いました。「海の塩水で体を洗い、風に当たればよくなるだろう。」と嘘を教えました。

「ありがとうございます。」

白兔は言われたとおりにやってみましたが、治るどころか海水がしみて、ますます痛くなりました。

するとそこへ大きな荷物を持った別の神様が、やってきました。この神様は先に進んでいった意地悪な神様たちの大荷物を持たされていました。優しい神様は、白兔に気づきました。そうか、そうか、可愛そうに。先ず川の水で体を洗って、蒲の穂綿にくるまりなさい。

白兔が言われたとおりにすると、痛みは治まり、白い毛も生えてきて、体はすっかり元どおりになりました。

「ありがとうございました。」白兔がお礼を言うと、優しい神様は言いました。

「もう誰も騙してはいけないよ。嘘をつくと自分に返ってくることになるんだよ。」

「はい、もう嘘はつきません。」

白兔は心から反省しました。そして、優しい神様に言いました。

「あの意地悪な神様たちは、誰も八神姫とは結婚できないでしょう。八神姫が選ぶのは荷物運びをしているあなたでしょう。」

それから、白兔が言ったとおりに、八神姫は優しい神様を選び結婚しました。

白兔は、その後も因幡の国で幸せに暮らしたそうです。